

第45回 記者懇談会実施概要

- 1 日 時 平成20年1月28日(月) 15時～
- 2 場 所 100周年記念会館 第2会議室
- 3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00～16:00)

・^{しみず たかし}清水 崇 経済学部准教授
発表テーマ「貨幣とは何か」[資料1](#)

・^{いわさき やすひこ}岩崎 泰彦 化学生命工学部准教授
発表テーマ「細胞の“顔”を識別するナノマテリアル」[資料2](#)

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00～16:30)

- ① 2008年度入学試験志願者状況について [資料3](#)
- ② 2008年度入学手続きのWeb化について [資料4](#)
- ③ 2007年度卒業式及び大学院学位(修士・専門職)記授与式の挙行について [資料5](#)
- ④ 全学共通科目の導入について [資料6](#)
- ⑤ GPA制度の導入について [資料7](#)
- ⑥ 関西大学ビジネスプラン・コンペティション「KUBIC2008『学生の力』」の応募要領について [資料8](#)
- ⑦ 総合学生会館メディアパーク凜風館の受賞・評価認証について [資料9](#)
- ⑧ 関大生の活躍について [資料10](#)
- ⑨ 卒業生の活躍について [資料11](#)
- ⑩ 関西大学日本・EU研究センターにおけるJapan Weekの開催について [資料12](#)

4 大学側出席者

河田悌一学長、良永康平学長補佐、川原哲夫学長課長
清水崇経済学准教授、岩崎泰彦化学生命工学部准教授
高瀬武典全学共通教育推進機構長(社会学部教授)
藪田貫文学部教授、ネラ・ノッパ日本・EU研究センター特別学術職員
北田伸治総合企画室長、藤本清高広報課長 他

5 参考資料

- (1) 現代GP「実践的総合キャリア教育の推進」シンポジウムチラシ
- (2) e-LINCフォーラムチラシ
- (3) 関西中小企業の活性化と経営革新セミナーチラシ
- (4) エクステンション・リードセンター2008講座案内

貨幣とは何か

経済学部准教授 清水 崇

【概要】

われわれは貨幣を通じて日々の生活に必要なモノを手に入れている。すなわち、経済を「人体」に例えるならば、貨幣は経済全体の代謝にかかわる「血液」の役割を担っていると考えられる。

このように貨幣はわれわれの毎日の経済になくってはならないものであるにもかかわらず、「貨幣とは何か」という問いは、過去何人もの思想家を悩ませてきた難問である。例えば、普通われわれは貨幣と言えば紙幣や硬貨のようなものを思い浮かべる。しかし、人間の歴史を遡ってみると、実にさまざまな種類のものが貨幣として流通していたということがわかる。

この研究発表では、現実に用いられてきたさまざまな貨幣の例を紹介しつつ、貨幣とは何かについて考察する。そのことによって、われわれの経済や政策を考えていく上で重要なことについても議論する。

【プロフィール】

関西大学経済学部准教授。1970年東京都生まれ。1994年早稲田大学政治経済学部卒業。2001年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。博士（経済学）。東京大学大学院経済学研究科助手、一橋大学大学院経済学研究科専任講師を経て、2004年本学に着任。著書：『サーチ理論 分権的取引の経済学』東京大学出版会（共著）。主要論文：“A Theory of Money and Market Places,” *International Economic Review* 46(1), 2005, pp.35-59（共著）、“On the Role of Tax-Subsidy Scheme in Money Search Models,” *International Economic Review* 48(2), 2007, pp.575-606（共著）。専門はゲーム理論、貨幣経済学、サーチ理論。

細胞の“顔”を識別するナノマテリアル

化学生命工学部准教授 岩崎泰彦

【概要】

必要最小限の薬物を、必要な時、治療すべき局所だけに輸送する理想的な薬物治療の実現に向けた様々な薬物輸送担体の設計が行われている。我々は、最近、生体内リン脂質の構造に倣ったポリマーで調製したナノ微粒子を用い、ある特殊な糖鎖を持つ細胞のみに薬物を輸送できる新たな方法を確立したので紹介する。

生体は極めて複雑な防御機構を備えており、それにより自らを守っている。人工材料を用いて治療を行う時には生体の防御反応が障壁となり、様々な制限が強いられる。このことは薬物治療においても常に解決すべき課題として挙げられ、生体内で異物認識されず、薬物を目的部位に輸送できる担体の創出が求められている。

筆者らが研究を遂行しているリン脂質ポリマーは、生体膜を構成する中性のリン脂質分子と同じ極性基を有し、親水性が高く、静電的に中性であることから、タンパク質とほとんど相互作用しない。生体内ではタンパク質との相互作用を起点とし細胞レベルの異物認識反応が惹起されるが、リン脂質ポリマーを用いることにより、そのような反応を効果的に抑制できる。

親水性のリン脂質モノマーと疎水性のアルキルメタクリレートとの水溶性コポリマーを乳化剤として、ポリ乳酸を核としたナノ粒子を調製した。リン脂質ポリマーで表面を完全に覆われたナノ粒子は免疫細胞に接触しても、全く貪食（異物認識）されず、ステルス性に優れていることが分かった。

細胞の分子認識に関わる生物機能はほとんどが糖鎖によって支配されており、すなわち糖鎖は細胞の“顔”である。糖鎖の生合成経路を利用し、細胞表層にある一定期間、非天然糖鎖（標識）を誘導した。この標識糖鎖と化学的に反応する置換基を上記のリン脂質ポリマーナノ粒子に導入し、細胞に接触させたところ、標識糖鎖を持つ細胞のみに粒子が選択的に取り込まれることが分かった。この粒子は様々な薬物と複合化でき、標的細胞にのみ薬物を選択的に輸送できることも明らかにした。

【プロフィール】

関西大学化学生命工学部准教授。1971年東京生まれ。1995年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程修了後、東京医科歯科大学医用器材研究所教務補佐員、助手となる。1998年に博士（工学）を取得後、同年、東京医科歯科大学生体材料工学研究所助教授となる。2000年に米国マサチューセッツ州立大学在外研究員。2007年4月より本学に着任。2005年に高分子学会高分子研究奨励賞を受賞した。趣味は、山登り、キャンプ、スキーなど。